

くまもと文学・歴史館報

くまもと
文学
歴史館

第4号 目次

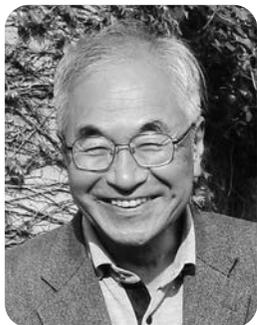
巻頭言 服部英雄(くまもと文学・歴史館長)	1頁
特別展「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」報告	2頁~5頁
企画展・収蔵品展・新収蔵資料報告	6頁・7頁
友の会活動報告	8頁

くまもと文学・歴史館では、秋季特別展示会「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」を開催した。多くの関係文化財を展示できたが、とくに蒙古襲来絵詞原本を宮内庁三の丸尚蔵館より借出し展示することができて、多くの来館者を迎えることができた。

絵詞は肥後国御家人竹崎季長(たけざき・すえなが)が、文永の役(文永合戦)、弘安の役での自らの体験を描いた絵巻物で、従軍体験が連続する絵画として描かれた。これほどに貴重な歴史資料は世界的にもめずらしいものと考えられる。

三の丸尚蔵館は、きわめて好意的で、前向きに検討くださった。二〇一六年四月の熊本震災からの復興を支援するという気持ちが強くなったと思う。開催が公表できるまでにはやや時間がかかったけれど、補正予算の獲得には知事以下県庁全体が支援くださった。本館としても超国宝級の遺産の展示は初めてであったから、いくつかの課題があつて、ひとつひとつをスタッフの努力で解決し、

開催を実現できた。会期中に、はやばやと一万人目の入館者に記念品を渡すことができたし、最終的には一万八千人を超える入館者があつた。熊本県民全体の1%という数字である。県民の竹崎季長熱をひしひしと感じる日々が続いた。宇城市にて講演したが、地元海東郷の自治会長さんから花束をいただき、感激した。



特別展 「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」を終えて

服部 英雄

くまもと文学・歴史館長

なかつたことを発見できた。例えば、描かれている蒙古馬は全て尻尾が巻いて結ばれていた。これは白描本を見ていた学芸員が気づいた。現物の方もやや退色していたが、やはり尻尾が結ばれていることが確認できる。奇妙な風俗だと思った。あとで中国の唐、太宗の陵墓(昭陵・西安)の石刻六駿に描かれた皇帝の愛馬が、みな尻

尾を巻いて逃げるといふ言葉のとおりだ。これは竹崎季長のシールを作っていた学芸員が気づいた。関連する各地からの展示品は、それまでの定説的な蒙古襲来の理解に再考を迫るものだったと自負している。パブリック(図録)の刊行も初めての試みとなったが、充実した内容で、好評であった。

展示期間中は日々この素晴らしい巻物を見ながら仲間・同僚と議論することができた。永青文庫の白描本蒙古襲来絵詞は二百年前の記録で、原本が退色したため不鮮明なところも、こちらでわかることがある。本物を見ながら、また白描本と比較しながら、ディスカッションをする。まことにすばらしく、楽しいことであつて、それまで気づか

尾が結ばれていることに気づいた。蒙古馬では一般的であつたらしい。日本の絵師がふつうの日本人が知らない外国の習俗を、正確に描きとっていた。これはなかなかの発見であろう。

季長や旗指の馬が敵に撃たれて跳ねたり倒れたりしているが、いずれも尻尾を後ろ足の間に入れていた。自分より強い敵がいると動物は尾を巻く。尻

聞き及ぶところでは、劣化の恐れがある美術品は保存への配慮から、限定された日数しか公開されない。現在、三の丸尚蔵館は施設を拡充する計画があり、リニューアル増設後には自館資料の展示が増加するだろうから、看板の一つである「蒙古襲来絵詞」が館外で展示される機会は減っていくのではないかと考えられる。このたびは、またとない機会であつた。展示の実現に向けて、ご尽力くださった多くの関係者に感謝します。

服部英雄(はっとり・ひでお) 一九四九年名古屋生まれ。九州大学名誉教授。東京大学大学院卒業後、文化庁文化財調査官として勤務。一九九四年より九州大学で教鞭を執る。二〇一六年四月より現職。

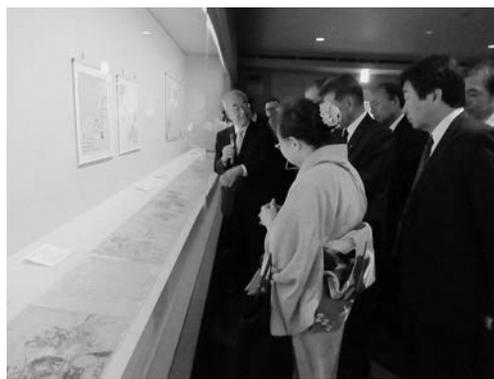
秋季特別展示会「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」

期間 平成30年11月1日～12月17日

前期：11月1日～19日／後期：11月21日～12月17日



熊本地震からの復興に取り組む県民の励みとするため、肥後国の御家人・竹崎季長が遺した「蒙古襲来絵詞」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵、以下「絵詞」)の实物を展示する特別展を開催した。当館は平成二十八年一月のリニューアルで国指定級の文化財の展示が可能となり、今回の企画につながった。会場は展示室1・3及び図書館ギャラリーで、展示資料点数は二十九件六十四点。図録、パンフレットを無料で配布した。また、展示の見どころなどを公式ツイッターで発信する(投稿



展示室1 絵詞を観覧する来場者

数十一回)など、平成三十年三月以降リニューアルしたHPやSNSを積極的に活用し、来館者を呼び込んだ。その結果、県内外から一八、一五六名の来場者があった。

展示室1・2

第1章：蒙古襲来絵詞の世界

全長約四十三mの「絵詞」のうち、前期・後期で約三十六mを展示。欠損部分の想定復元図を制作するなど、最新の研究を踏まえて詳細に解説した。

併せて熊本藩で制作した「絵詞」の模本や竹崎季長が書き遺した古文書を紹介した。

第2章：蒙古軍の実像

水中考古学の成果をもとに蒙古軍の武器・武具(てつほう)・鉄兜・弓・刀など)や、捕虜の軍人とされる人物が日本で經典の補整をしたことが記された大般若経を展示した。



領経営の手腕や、長門国守護代の永富氏との関係などから、絵詞制作の背景を探った。また、「絵詞」に登場する武士が実際に蒙古合戦へ参陣したことを確認できる古文書などを紹介した。

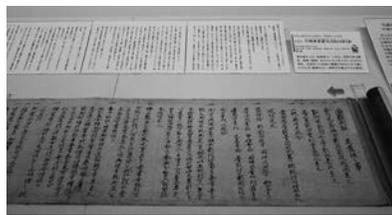
第4章：語られる「神風」イメージ

蒙古襲来の衝撃が後世に与えた影響について、幕末の欧米列強の進出、日清・日露戦争、アジア太平洋戦争に焦点を当てて考察。下関戦争を蒙古襲来に仮託して描いた幕末の錦絵や、対外的な緊張のなかで刊行された文学作品などを展示し、蒙古襲来がときに神国思想と結びついた「神風」

第3章：肥後の御家人・竹崎季長のルーツ

竹崎季長のルーツについて、宇城市竹崎・玉名市竹崎(以上、熊本県)・下関市竹崎(山口県)に着目。彼の所

様相を紹介した。



展示室3

「元寇」を斬
新な視点で描い
たマンガ『アン
ゴルモア 元寇
合戦記』(たか
ぎ七彦著・K A
DOKAWA)
とのコラボ展示
を実施した。単
行本表紙イラス
トや複製原画、たかぎ氏の自筆色紙な
どを展示。アニメ版第一話を上映し、
単行本の読み放題コーナーを設置した。
併せて関連図書や、「絵詞」「元寇」を
掲載する県内小・中・高等学校で使用
中の社会科(歴史)教科書を紹介した。
また、『アンゴルモア』のイラストを
掲示した記念撮影コーナーを設けた。



図書館ギャラリー

蒙古襲来絵詞の全貌(パネル展示)

「絵詞」の実物大複製パネルを制作



し、解説とともに展示した。

《関連イベント》

◎知事記者会見

日時…6月22日
会場…知事応接室

宮内庁から「蒙古襲来絵詞」の貸付承認の通知を受け、浦島熊本県知事による臨時記者会見をおこなった。会見では、知事が展示会開催の決定、経緯、絵詞の由来等を発表し、服部英雄館長が展示内容の詳細を説明した。報道機関十二社が出席した。

◎オープニングセレモニー

日時…11月1日
会場…くまもと文学・歴史館ロビー

主催者挨拶(服部英雄館長)、来賓挨拶(田嶋徹熊本県副知事)、テープカット(秋岡廣宣氏、村上輝和熊本県文化協会長、田嶋副知事、高木健次教育警察常任委員長、宮尾千加子教育長、服部館長)、セレモニー終了後、服部館長による展示解説をおこなった。

◎シンポジウム「蒙古襲来の真実」

日時…12月2日
場所…熊本県立図書館3階大研修室
基調報告① 池田榮史氏(琉球大学教授)

「蒙古襲来絵詞」の理解に向けてー長崎県鷹島海底遺跡の水中考古学調査成果からー



基調報告② 高橋典幸氏

(東京大学准教授)
「モンゴル襲来をめぐる外交戦」
コメント 服部英雄館長
参加者…一三八名

◎講演会「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」

日時…11月4日(前期展示)
11月21日(後期展示)
場所…熊本県立図書館3階大研修室
講師…服部英雄館長
参加者…一四〇名(前期展示)
一七三名(後期展示)

◎ワークショップ

「自分だけの「蒙古襲来絵詞」を作ろう!」
日時…12月8日

場所…くまもと文学・歴史館展示室3
講師…当館学芸員
対象…小・中学生
参加者…二十四名(児童十四名、保護者十名)

子どもたちが展示を観ながら、永青文庫白描本をもとに作成した「絵詞」のぬり絵に色をつけることで、「絵詞」への理解を深めた。



◎ギャラリートーク

場所…くまもと文学・歴史館
エントランスロビー集合
日時…11月10日(服部英雄館長)
12月15日(当館学芸員)

《反響》

展示会の反響は大きく、来場者数は一日平均四五四名、総数一八、一五六名であった。来場者アンケートでは回答者三、一四九名のうち、県内からが八十三%、県外(四七都道府県)が十六%、海外が1%。十一月二十五日には一万人目の来場者に、記念品として服部英雄館長の著書が贈られた。

シンポジウム 「蒙古襲来の真実」

◎基調講演1

『蒙古襲来絵詞』の理解に向けて

―長崎県松浦市鷹島海底遺跡の

水中考古学調査成果から―

講師 池田榮史氏(琉球大学教授)

蒙古襲来に関する海底遺跡調査は、

港の改修工事に伴う発掘調査を中心に

始まりました。そこで、陶磁器や磁

土製品(てつはう)など多くの遺物が

出土したことから、蒙古襲来の完全把

握を目指した水中考古学的な調査が始

まります。鷹島の南海岸、伊万里湾全

体の海底地図、断層図をつくり、その

地図をもとに海中での遺物の確認作業

をし、二隻の船を発掘しました。その

結果、「鷹島神崎遺跡」は国の指定遺

跡になりました。今後は、海底遺跡の

継続的な調査や、保存・活用、国際的

な共同研究を進めていく必要があります。

これまでの蒙古襲来研究は『蒙古

襲来絵詞』等の分析が中心でしたが、



池田榮史氏

水中考古学の調査成果を含めた研究の刷新が期待されます。日本の科学技術の発達と周りを海に囲まれているという環境を活かし、今後は水中考古学が日本の取り組むべき研究分野の大きな柱になっていくと考えています。

◎基調講演2

モンゴル襲来をめぐる外交戦

講師 高橋典幸氏(東京大学准教授)

モンゴル襲来は、二度の戦争だけでは

なく前後の外交交渉(招諭活動)も

含めて考える必要があります。モンゴ

ルの招諭使派遣は、私の数え方によれ

ば、約三十年間で十二回試みられます

が、幕府・朝廷と交渉できたのは全部

で七回。その間、主に三つの変化が見

られます。第一は遣使ルートが高麗経

由から慶元(寧波)経由になる(南宋

のモンゴルへの降伏が契機)、第二は

文永の役後に日本が使者を処刑・抑留

するようになる、第三は使者に僧侶が



高橋典幸氏

同行するなど招諭使の顔ぶれが変化することです。特に着目したのが、軍事よりも外交を重視し、文永の役の直前に招諭使を務めた趙良弼です。彼の来日を機に、三別抄や南宋が日本に接触を図り、日本からも使者を派遣した形跡が見受けられるなど、戦争の前後には日本の大宰府あたりで東アジアの外交戦が展開していました。

討議部分

戦争における外交の役割

服部英雄(以下、服部)・モンゴルとの戦争は不可避だったのか、日本を

攻める目的は何かをお聞きします。

高橋典幸氏(以下、高橋)・モンゴル

としては日本が服属するという結果

がゴールでしたから、外交交渉をう

まく進めるための手段として文永の

役があったのかなという感じもしま

すので、日本が招諭活動に応じない

となれば、少なくとも文永の役は避

けることはできなかったと思います。

服部・戦争の前後でも日本とモンゴ

ルの間の貿易は継続されており、モ

ンゴルが日本を攻める目的は貿易だ

けではないかと私は考えますが、その

辺はいかがでしょうか。

高橋・日本とモンゴルの間の民間貿易

は全く断絶することはないと思いま

すが、文永の役・弘安の役の段階で

貿易量が減っているらしいというこ

とは指摘されています。日本を攻めた理由は貿易問題だけでなく、政治的な問題、特に文永の役に関しては南宋の攻略が最大の目的だったのではないでしょうか。

服部・弘安の役の江南軍の遅延などモンゴル軍の作戦には稚拙さがあるように思いますが、この点はいかがですか。高麗軍は江南軍の到着を待っていたのではないかと思っているのですが。

高橋・直接的には江南軍の司令官が病気で交代したことがありますが、二方面作戦というのは前近代では相当難しいのではなからうかと。当時の戦争のあり方として果たして江南軍は遅れたと言えるかどうか、誤差の範囲で織り込み済みだった可能性もあるのではないかと思っています。

戦争の実像

服部・現在、音波探査で確認できる沈

没船の数ほどのくらいでしょうか。

池田榮史氏(以下、池田)・発掘した

二隻のほかにあと三カ所くらいは確

実で、今後増えていくと思います。

服部・今後、沈没船の数などを推測す

ることはできるのでしょうか。

池田・類型化された音波探査の反応に

基づき、発掘した遺跡の船の類型か

ら推測すれば推定は可能だと思いま

す。服部・沈没船でバラストが船の前方に

固まって積まれている例がありますが、その理由は何でしょうか。

池田：航海のためではなく、戦後処理の中で、海に漂うモンゴルの船を日本側が意識的に沈める目的でやった可能性もあるのかもしれない。

服部：沈没船の碇が打たれた方角、船の沈み方と嵐との関係について何か分かることはありますか。

池田：発見された碇の方向を見ると、ほぼ船の南側に打たれているので、嵐は南風が強く、船は北側の鷹島へとあおられたのではないかと考えています。

服部：「てつほう」は投石器で投げると聞いたのですが、その材料が出土しているのですか。

池田：今のところ投石器そのものは出ていないのですが、投石器に使ったであろうと思われる石の錘が出ています。投石器の使用例としては、元が南宋との戦いで石弾を飛ばすために用いたことは確実です。

服部：モンゴル軍の弓についてはいかがでしょうか。

池田：木製・黒漆塗の短弓の先端部分と(今回展示)、引き金を引いて矢を飛ばす弩が出土しています。

服部：バックルなど帯金具は、それを身に着けた人物がいたということでしょうか。

池田：ベルトを含めて、弓矢などを入れる道具などに使用される場合も多

かったのではないのでしょうか。

服部：人骨も出土していますが、兵士の骨と考えられますか。また、嵐の時、兵士は船に乗って遭難したのか、陸にいたのか、馬はどうしていたのかについてはいかがですか。

池田：人骨は蒙古襲来関係の遺物と一緒に出土しているので、嵐で遭難した人物のものではないかとは思っています。当然、馬も遭難した船に乗っていた可能性は高いと思います。

服部：火薬はすべて壺で運んだとご説明がありました。普通の蓋で湿気は防げるのですか。

池田：口をしっかり閉め、仕切りがある船に積んでいますので、湿気に関しては十分対応していると思います。

服部：文献研究の立場からみて、水中考古学がもたらす新たな研究成果とは何でしょうか。

高橋：考古学は具体的な物を扱うので、文献研究と補完し合って新しい研究成果が得られます。しかも、陸だけでなく海や湖などからの発掘が進むことは画期的だと思います。

服部：その他に、船についてですが、私はモンゴル軍の船に釘が多数打つてあることから老朽船の可能性を指摘したことがあります。中国の船の構造上の問題だとお考えですか。

池田：キールに仕切り板を立てて張り付ける構造なので、構造的に釘をたくさん打っているのだと思います。

また、文永の役の船数については、私も服部先生と同じく、文献資料から九〇艘で三種類と理解していますが、慶元を出航した船も同様かどうかは不明です。水中考古学の成果と文献資料とを合わせて、もう少し調査したいと考えています。

服部：推測二十七メートルほど大型の船については、商船転用ではないのかと思っただけですが。

池田：おっしゃるとおり、商船転用は確実にあると思います。

服部：船の水漏れ防止は槓肌、木の繊維を詰めて応急手当するようですが、沈没船に埋め込まれた石灰も応急手当のために使用されたのですか。また、補修は船の上でもできますか。

池田：船の建造や補修の際、木材の間を埋めるために石灰を使います。鷹島の一号船はキールの脇に石灰で木材の間を埋めた跡が見られます。補修は船を陸上に引きあげて行うなど、様々な方法があると思います。

服部：捕虜は殺されたり奴隷になったりしたということですが、特に軍人は、鎌倉幕府にとっては非常に貴重な情報源だったのではないか、いわゆる奴隷的な待遇ではなかったのではないかと思うのですが。

池田：捕虜の才能と置かれた状況により様々だと思うのですが、高橋先生はそこら辺をご存じではないですか。

高橋：技術を持っている人は活用され

ると思いますが、すべての捕虜が優遇されたわけではないと推測できる資料もあります。

服部：軍人の何三が補整した森光寺の大般若経は、もとは播磨国の国府周辺の印達北条天満宮にありました。幕府が彼を優遇していた証左ではないかと私は考えています。

高橋：そういう人は結構いますね。決して外国人だから差別するという世界ではなく、個人の力量によってほとんど重用されるような社会が日本の中世だったのでないかと考えています。

「蒙古襲来」とは 何であったのか

高橋：日本の中世で真剣な外交交渉が行われた未曾有の機会、試練でしたが、戦争という形で終わり、政治家が外交交渉の経験を十分に学習する機会を逸してしまったのではないかと思います。

池田：数百年以来の国際戦争でしたが、原因と結果を日本の中では整理できなかったのではないのでしょうか。

服部：戦後の日本ではモンゴルを警戒して軍事費が嵩み、恩賞地も少ない。わずかに三十年で鎌倉幕府は滅びざるを得なかった。その後の歴史を見て

も、対外戦争をした政権は短命で終わる、という側面もあるのではないのでしょうか。

企画展

「貸本漫画の遺産」

期間 7月19日～9月17日
会場 展示室2・3



現在の漫画文化の礎となった貸本漫画を紹介する展示会。第一章「貸本漫画とは」では、昭和二十年代から三十年代に盛んだった貸本屋に置かれた貸本漫画についての紹介を通して、その発生から隆盛、衰退までの流れを示した。第二章「貸本漫画で活躍した作家たち」では、平田弘史、さいとう・たかを、水島新司らの自筆原稿や作品を展示し、貸本漫画の年表や出版点数のグラフなどを用いて、時代の流れを示した。第三章「熊本県内貸本屋マップ」では、昭和四十年代以降にあった貸本屋をピックアップし、一覧を作り、熊本市内は学校区ごとの軒数を示した。



併せて、展示室内に「みんなで作ろう貸本屋マップ」を設置し、来館者から貸本屋の情報を集め、それをマップに反映した。四十八軒の貸本屋の情報が新たに寄せられた。第四章「貸本屋の再現展示」では、貸本屋で実際に使用された伝票や印鑑を配置し、貸本漫画を本棚に設置して、実際の店頭の雰囲気を生み出した。第五章「貸本屋で育った熊本出身の評論家たち」では、熊本市立五福小学校出身の五名の評論家を紹介し、それぞれの業績を資料とともに展示した。その中の一人、漫画評論家の米沢嘉博は五十万人を動員するコミックマーケットを創始した方でもあ



貸本屋の再現展示コーナー

り、その業績を映像を交えながら紹介した。展示室3では、貸本時代と現代の人気漫画を手にとって読めるように約千三百冊設置。夏休み中でもあり、老若男女、多くの来館者で賑わった。企画展の関連行事として、八月五日に、SF作家の梶尾真治氏、詩人の伊藤比呂美氏、合志マンガコミュニティ館長の橋本博氏によるシンポジウムを開催。貸本漫画の思い出や、漫画への熱い想いなどを語りあった。また、八月十二日には、明治大学の藤本由香里氏による記念講演会を開催。貸本漫画が現代の漫画文化にもたらした功績を紹介した。

新収蔵資料

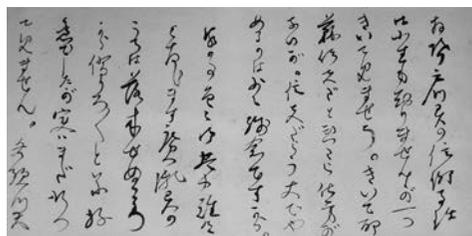
○夏目漱石書簡額

(大谷繞石宛)
おわたじよせき

明治四十年九月十四日付の漱石自筆書簡。宛先の大谷繞石は松江出身の英文学者で俳人。ラフカディオ・ハーンの子として著作の翻訳出版などに従事した。

書簡の内容は真宗大学の英語教師推薦依頼に関わるもので、依頼を受けた漱石は「戸川君」を紹介。これは熊本県玉名出身の英文学者・戸川秋骨である。

また、借家の家賃が上がるというので、漱石は書簡後半で引越先の照会もしている。「下旬には引き移る事に



(冒頭部分)

致す積」の言葉通り月末には転居することに
なるが、このときの新居が牛込区早稲田南町の「漱石山房」、漱石の終の棲家となる。

武士の教科書

—永青文庫寄託漢籍資料から—

期間 2月7日〜3月18日
会場 展示室1・3



熊本県立図書館が保管する、特別資料コレクションである「文庫」を紹介するシリーズ企画展の第二弾。今回のコレクションは公益財団法人永青文庫から寄託された約二千七百冊に及ぶ漢籍等資料で、その一部をテーマに沿って展示した。

第一章「武士の教科書ってどんなもの？」では、藩校「時習館」での四書五経を中心とした学びの在り方を紹介。第二章「藩主の学問―細川重賢―」では、「肥後の鳳凰」と呼ばれた、熊本藩六代藩主重賢が、「三国志」を六年かけて学んだことを日記や漢籍への書き込みから辿る。第三章「永青文庫寄託漢籍コレクションについて」では、

大名の愛蔵本コレクションとしての特徴である、書き込み、印記、装丁・刷の三つを提示した。また、熊本本の漢字を牽引したともいえる「時習館」の教授たちの資料を紹介。第四章「県内高等学校所蔵資料の紹介」では、熊本県重要文化財に指定されている「養安院本」や、散逸してしまった藩校の蔵書「時習館本」を紹介した。展示室3では、より漢籍に親しみをもっていただくために漢籍に関するマンガコーナーも設置。企画展関連行事として、二月十日に高橋智氏（慶應義塾大学）による講演会「熊本県立図書館保管漢籍細川文庫について」を、二月十六日に古勝隆一氏（京都大学人文科学研究所）による講演会「益城が生んだ江戸の儒者、松崎慊堂（まつざきこうどう）」を開催。



収蔵品展 アーカイブズシリーズ

「くまもとの記憶」をキーワードに熊本県立図書館とくまもと文学・歴史館の収蔵品を紹介するシリーズ展示。開館記念特別展「文学と歴史でたどるくまもとの記憶」を初回とし、二〇一五年度に2、震災を受けた一六年度に3〜6、一七年度に7〜10を実施。一八年度は「明治百五十年」を年度テーマに定め、明治初年から四十年代までを三期に分けた。

創刊から八〇年を迎えた雑誌『日本談義』関連資料および石牟礼道子の自筆原稿を展示した。

アーカイブズに見るくまもと11

◆明治150年(2) 明治の温泉開発

◆徳永直没後60年

期間 5月18日〜7月5日

西南戦争直後の温泉開発ブームに焦点を当てて展示。文学分野では没後六十年になる熊本生まれのプロレタリア作家、徳永直を特集し、自筆原稿や色紙、遺品の懐中時計などを展示した。

アーカイブズに見るくまもと12

◆明治150年(3)

◆中村汀女と生まれたころ

第1期 9月15日〜10月8日

第2期 平成31年1月4日〜21日

熊本市出身の俳人・中村汀女の俳句と生涯を、自筆資料や遺品を通して紹介。あわせて汀女が生まれた明治三十三年、西暦一九〇〇年ころの熊本を文学資料と歴史史料で展示。

アーカイブズに見るくまもと10
◆明治維新150年 明治の始まりと熊本
◆耕治人没後30年

期間 3月15日〜5月7日

大政奉還前後の政治情勢に係る史料を熊本藩と人吉藩で展示。理想国家を目指す明治初頭の日本を史料で紹介。文学分野では没後三十年を迎えた八代出身の作家、耕治人を特集したほか、



友の会事業

◆定例事業

○月案内発行 くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。

○文章勉強会 毎月一回開催。有志による文章講座

○歴史勉強会 毎月一回開催。文学・歴史館職員を講師とする古文書講座

◆「湧水二十六号発行」
会員の作品を集めた文芸誌「湧水」を年一回発行。

◆今年度の主な事業

4月 ○第2回熊本地震朗読会(15日)

5月 ○くまもと文学・歴史館友の会総会及び記念講演会(13日)

平成29年度の事業・会計報告、30年



第2回 熊本地震朗読会

度の事業・予算計画、新世話人が決定。青木勝士参事による記念講演会を開催。演題は「1877 西南戦争」

6月 ○初夏の文学・歴史探訪(2日)

西南戦争資料館(蓮田善明歌碑・七木官軍墓地) 玉名高瀬裏川花しょうぶまつりくまもと野神社寂心さんのクス

7月 ○連続講座 講師 服部館長(12日)

「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺跡の世界遺産登録にあたって」

10月 ○第一回湧水講演会(17日)

11月 ○秋の文学・歴史散歩(16日)

原城址く島原武家屋敷を巡る



秋の文学・歴史散歩(原城址)

12月 ○シンポジウム「蒙古襲来の真実」共催(2日)

1月 ○第2回湧水講演会(12日)

2月 ○「湧水」合評会(19日)

○第3回湧水講演会(20日)

新企画「湧水講演会」

今年度より新しく始まった企画。

友の会が講師となり開催する講演会。

第一回の講師は上田誠也氏。

演題は「文才高し! 頼山陽物語」熱のこもったわかりやすいお話に受講者は聞き入っていた。

第二回の講師は永田満徳氏。演題は「三島由紀夫の誕生く文壇デビューと熊本県人の関わりく」。第三回の講師は丸山由美子氏。演題は「わたしと上田幸法」



第1回 湧水講演会

くまもと文学・歴史館のご案内

所在地

熊本市中央区出水2丁目5番1号

(熊本県立図書館併設)

電話(096) 384-5000(代)

開館時間

午前9時30分く午後5時15分

休館日

火曜日・毎月最終金曜日

年末年始・特別整理期間

入場料

無料

最寄りの交通機関

(1)市電II「市立体育館前」下車・徒歩5分

(2)バスII「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩5分

文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。

くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。

詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合わせ下さい。

くまもと文学・歴史館報

第4号

平成31年(2019年) 3月31日発行

編集発行 くまもと文学・歴史館

〒862-8612 熊本市中央区 出水2丁目5番1号

電話 096-384-5000(代)